

考えて生きる 大学は知の宝庫

—東海学院大学・東海学院大学短期大学部公開講座 2020—

社会貢献委員会

要 約

本学は毎年、社会貢献委員会の主催で公開講座のシリーズを実施している。本学の教員は地域住民のために自分の研究分野に関連する生活に役立つ情報を提供している。今年度のシリーズのテーマは当たり前となったさまざまな生活の要素を積極的に考えて生きることだった。

これらの公開講座の記録を今まで本学のホームページで公開してきたが、講演は授業でも学会発表でもなく、教員の研究の成果になっている。今年度から研究の記録をこの研究年報でも報告することにした。

キーワード：公開講座、食健康、夫婦愛、源氏物語、健康長寿、活字文化、検査値、ベーターヴェン

第1回 人生100年時代—食と健康を考える

講師 野澤義則（名誉教授）

10/7（水）13:30～15:00

令和2年度第1回公開講座（受講者42名）が10月7日に開催されました。本学名誉教授の野澤義則先生による「人生100年時代—食と健康を考える」と題された講演は、長寿化した社会において人と関わりながら、「元気で長生き」を考えようという興味深いお話でした。私たちは、栄養や運動により未病の状態から健康に戻ることができます。示唆に富んだメッセージをいくつかご紹介いたします。

まず、平均寿命と健康寿命の推移（男女別）を見ました。これまでの世界最高齢者は124歳のフランス女性（故人）でしたが、現在は117歳の日本人女性です。日本人男性の最高齢者は110歳、平均寿命は女性が87.45歳、男性が81.41歳と、過去最高を更新しました。しかしながら、ここで注目すべきは、平均寿命と健康寿命の「差」です。女性はその差が12年、男性は9年、つまり介護を必要とする人は女性が多い、ということです。

WHOの定義によると健康とは心身に加え“社会的に”完全に良い状態をいいます。単に「疾病または虚弱ではないということ」ではありません。私たちの日常は、病気ではないが健康でもない状態にあることが多いです。岐阜県民の健康状態の自己評価は8割以上が「よい」または「まあよい」と感じています。皆さんはいかがでしょう。

近年、「フレイル」という言葉をよく耳にするようにな

りました。これは、日本老年医学会が2014年に提唱した概念で、「Frailty（虚弱）」の日本語訳です。加齢とともに心身の活力が低下し、生活機能が障害され、心身の脆弱性が出現した状態です。つまり、健常から要介護へ移行する中間の段階を指します。フレイルの進行を予防するためには、身体的、精神・心理的、社会的な側面から総合的にみて対応する必要があります。健康維持の基本は①食（栄養）、②運動、③休養（睡眠）、④その他の生活習慣（喫煙、飲酒など）ですが、今回は「運動」に触れつつ、「食」を中心にお話いただきました。

平成17～27年の運動習慣のある者の割合の推移を見ても、男女ともに少しずつ増えています。岐阜県の調査では、運動習慣のある人は30歳代が最も少なく、70歳代までは年齢が上がるにつれて増加しています。では、一日どのくらい歩けばよいのでしょうか。『週刊朝日』（2018年10月12日号）の記事によると、サラリーマン世代（40～59歳）は約8千～1万歩、60代前半は8千歩、65～74歳は7千歩、75歳以上は5千歩とのことです。いずれも家の中の移動も含めた目標歩数です。実は、運動による認知機能の向上は生物学レベル、行動学的レベル、社会心理学的レベルからも指摘されています。

ところで、今や食べ物が遺伝子にもかかわる時代です。“食べる（Eat）”の意味は、食べた物が体を構成する成分となり、何を食べているかでどういう人かがわかるということです。食べ物が人を形作り、食べるものによって性格まで分かってしまうのです。医食同源・薬食同源

に関する歴史的考察を踏まえ、現在注目すべき「食の機能」はファイトケミカルであるといっただけでよいでしょう。食の機能には、栄養素（一次機能）、嗜好（二次機能）、生体調節機能（三次機能）があります。ファイトケミカルはポリフェノールやカロテノイドなど、機能性成分のことです。ファイト（phyto）とは植物に含まれる非栄養素で、健康に有用な化学成分の総称です。日本では、1984年に機能性食品という言い方をするようになりました。健康維持に欠かせない5大栄養素の機能を踏まえ、バランスのとれた食事をすることが肝要です。百寿者の人たちが中年以降に、食事について心がけてきたことは、①一日3回きちんと食べる、②腹八分目、③家族そろって食べる、④緑黄色野菜を食べる、です。2016年のデータによると、岐阜県の男性の野菜摂取量は全国38位、女性は33位です。果物摂取量は44位と非常に少ないことがわかっています。岐阜は柿の産地です。柿はミネラルやビタミンが豊富な果物ですので、是非、伝統食文化である柿を食べて身も心も健やかに！

最後に免疫力アップの秘訣もお話いただきました。例えば、食事は何でもほどよく食べること、運動は頑張りすぎないこと、暢気にそして大笑いすること等です。私たちは社会的動物です。個として存在しても、絶えず他者との関りにおいて存在しています。今年の公開講座は全7回ですので、是非、「皆勤賞」を目指して次回もご参加ください。

（文責 野澤美香（総合福祉学生）、遠藤雅子）

第2回 夫婦愛を考える

講師 田上博幸（本学講師）

10/15（木）13:30～15:00

令和2年度第2回公開講座（受講者31名）が10月15日に開催されました。総合福祉学科の田上博幸先生による「夫婦愛を考える ～大学は知の宝庫～」と題された講演は、精神保健学の観点から、夫婦関係をはじめ親密な人間関係において、共依存に陥らず、健全な相互関係を築くヒントを提供するものでした。印象に残った話題をいくつかご紹介します。

親に依存せざるを得ない幼児期に、母親からの扶養のあり方がその子の対人関係の原型を形作ります。やがて成人した際には、健全な相互依存の関係を結んでいくこととなります。

しかし、もの、行動、そして人間関係に依存する、依存症と呼ばれる病的な状態があります。この人間関係へ

の依存の例に、恋愛依存、DVがあり、これらは共依存といい、これはかかわっている双方が健全ではない状況にあるといえるでしょう。というのも、たとえばDVにおいて、確かに暴力を振るう側に問題があるのはもちろんですが、力を振る相手から、その暴力の受け手は逃げ出そうとせず、しかも「相手には私が必要なのだ」と考え、自らの承認欲求を満たそうと考えています。これでは暴力が止みません。

共依存とは、愛情に名を借りて互いに相手を支配しようとする関係で、それが例えば母子共依存の場合、高じると子は引きこもり精神障害に至ることもあり、母はアルコール依存症などを発症することがあります。共依存は、成長過程で暴力、暴言、ネグレクトなどを受けることによって愛着に問題が生じることで起きやすく、深刻な場合回避性障害、依存性障害、解離性障害といったパーソナリティ障害を伴います。

共依存の場合、「何度言ったらわかるのだ」と相手を罵倒し対等な関係の対話が成り立たず、共依存の関係にある人は生きづらさを抱え、地域社会から孤立しがちです。これに対し、健全な人間関係においては、「あなたを理解したい」「あなたがいるから私もがんばれる」という言葉が発せられ、自分の生き方を知り、相手の幸福を願います。人生に目的を持ち、地域社会とも結ばれて毎日を送っています。もし自分の持っている関係性に問題意識を持ったならば、このような健全な関係性を目指したいものです。

質疑応答においては、関係性修復への糸口をどうしたらよいかという問いがなされました。このご質問に対し、まず共依存かもしれないという気づきが重要で、気づいたことで問題の多くは解決に向かう、との応答をいただきました。

健全な人間関係への道しるべとして、個人の尊厳、目的のある人生、対等な対話、地域社会との繋がりがキーワードになりうると気づかされた、含蓄のある講演内容でした。

（文責 富田理恵）

第3回 源氏物語を考える

講師 木戸久二子（本学教授）

10/21（水）13:30～15:00

令和2年度第3回公開講座（受講者33名）が10月21日に開催されました。短期大学部教授の木戸久二子先生による「源氏物語を考える」と題された講演は、2000

年に発行された「二千円札」の図柄の解説から始まりました。

小渕首相の時代にミレニアムということで発行が決定された二千円札は、実在の人物をモデルにしていない点や、金額が偶数であること等、これまでの紙幣とは異なっていました。表面には沖縄の守礼門が描かれ、裏面は源氏物語にちなんだデザインとなっています。複数の絵巻から抜粋する形で描かれた裏面で注目すべきは「鈴虫巻Ⅱ」の絵です。その右下には同巻Ⅰから引用した詞書が書かれています。

次に、変体仮名について解説をいただきました。変体仮名とは、現代の平仮名とは異なる字体です。例えば、私たちが用いる「の」は「乃」から生じた字ですが、絵巻のなかでは「農」という文字の仮名が使われています。同様に、「ゆ」は「由」から生じた字ですが、「遊」という仮名で出てきます。

全 54 帖からなる源氏物語は、4 代にわたる 80 年近い年月における、光源氏を中心とする 400 人以上の人々の関わりが描かれています。400 字詰め原稿用紙に換算すると、2500 枚にも及ぶ超大作です。この物語は三部構成となっており、最初の 33 段は桐壺帝の御代から始まり、光源氏の栄華の日々が描かれます。8 段から成る第二部は、光源氏が罪の意識にさいなまれ因果応報と孤愁を感じ、出家を志すところまでです。第三部は、光源氏の子ども、孫たちの物語です。源氏物語の面白いところは、余韻を残して終わっている点です。源氏は果たして本当に出家したのか、出家した後どのような生活を送ったのか、最期はどうなったのか。宇治川に身を投げ、一命をとりとめた浮舟は、その後も言い寄る薫や匂宮に対してどう振る舞ったのか、その後の人生をどのような形で過ごしたのか、読み手である私たちの想像力が試されているといってもよいでしょう。紫式部はこの物語を通して、宗教も決して救いになるとは限らない、人間としてどのように生きてゆけばよいのか等を読者に投げかけています。

さて、1100 年代前半に作られた源氏物語絵巻ですが、絵画の技法には二つの特徴があります。それは、「吹抜屋台（ふきぬきやたい）」と「引目鉤鼻（ひきめかぎばな）」です。前者は、建物の屋根と天井を取り払って、あたかも斜め上から俯瞰したかのように描く絵画手法のことです。斜め上からの構図によって、あらゆる仕切りとそれが表現するあらゆる人間関係が、絵を見る者に強く意識化されます。後者は、細長い線で目を引き、鉤状に小さ

く「く」の字形に鼻を描くことです。しもぶくれの顔におちょぼ口といった様式のなかに、腹立たしく思う様ななどの微妙な心理が描かれています。実物は、五島美術館（東京都世田谷区）に 4 段、徳川美術館（愛知県名古屋）に 15 段、それぞれ所蔵されています。ここで、最先端技術を駆使した復元模写を見ました。「蓬生」と「夕霧」の巻はいずれも見違えるほど色鮮やかで、蓬の生えている様子、月明かりによって足元が白っぽく描かれていること、夕霧の妻の怒った表情なども容易に見てとれました。

次に朗読を聞きました。平安時代の読み方を再現したもので、ゆっくり、高齢の女性らしく語られ、発音が現代と違う点も分かりました。音を文字に表すと、「たあていとうてえとお」「ふあふいふうふえふお」といった音です。また、現代ではあまり使われない鼻濁音も確認することが出来ました。源氏物語は 30 以上の言語に翻訳され読まれています。平成になってからは、瀬戸内寂聴、橋本治、大塚ひかり、林望、角田光代各氏が訳しています。研究者ではなく作家や著述業の人たちによる訳は個性あふれる作品に仕上がっているようです。ちょっと手にしてみても読みやすいものを選び、面白いと思える部分から読んでみるのもよいかもしれません。

（文責 遠藤雅子）

第 4 回 「つながり」から健康長寿を考える 講師 大浦真一（本学講師）

11/5（木）13:30～15:00

令和 2 年度第 4 回公開講座（受講者 37 名）が 11 月 5 日に開催されました。心理学科の大浦真一先生による『「つながり」から健康長寿を考える ～大学は知の宝庫～』と題された講演は、社会的なつながりの健康への効果とその欠如による心身への悪影響といった理論的な要素と、つながりを作る一方法の紹介といった実践的な面の両方が組み合わされた、興味深い内容でした。その中で印象に残った話題をいくつか紹介します。

健康維持のため、運動や食事、睡眠が重要だと知られていて、実践している方も多いと思われます。しかし、寿命に及ぼす影響で最も大きな要因は、社会的つながりの有無であることが分かってきました。たとえば社会的活動の不参加が認知症の発症リスクを高めているという研究があります。

それはなぜでしょう。つながりが多いと、外出して運

動シストレスが解消され、周囲の人から、肯定的な感情が促されたり、サポートや刺激が与えられたりするので、健康に資すると考えられます。またゆるく広いつながりが健康に良いのです。それをうまくやれるのは、一般的に女性たちですが、男性はそうした女性をサポートすることでつながりを保ちたいところです。

さて、つながりと薬物依存の関係を見てみましょう。依存とは、社会的なつながりの欠如から生じることがわかってきました。薬物に依存する人は、ストレスを感じた時に人に頼ることが困難なので、薬物に依存することで苦痛を軽減し、ついには健康を害するのです。したがって、健康促進だけでなく、依存症防止の面からでもつながりが重要です。ではつながりを作るために、どうしたらよいでしょうか。そのひとつに、タッピングタッチと呼ばれる、触れることを介して心身や対人関係を改善できる方法があります。

触れることには、痛みの感覚の緩和、血圧とストレスの低下、成長ホルモンの分泌といった効果があることが報告されています。また、笑顔を作ったり、姿勢を整えたりすることで、気分が肯定的になるという報告もあります。また手を温めることで、他者に対して肯定的な行動が増加するという報告もあります。このようにからだの変化と心の変化には関連があるのです。

今回の講義では、タッピングタッチの中でも自分自身に行うセルフ・タッピングを体験しました。実施のポイントは、手指の腹で、左右交互に優しくゆっくり触ることです。顔や頭、胸やお腹に対し、8分ほどセルフ・タッピングを行っていると、からだが暖かくなってきたり、リラックスを感じたりしました。タッピングタッチは2人で相互にタッピングを行います。相手の背中を中心に、セルフ・タッピングと同じように手指の腹で左右交互にゆっくりとしたリズムで触れていきます。話したくなったら、相手と会話をしながら行ってもよいでしょう。好きな音楽を聴きながら実施しても構いません。

他者とのつながりを大切にし、時に触れあいながら、心豊かに過ごしたいと感じられる講演でした。

(文責 富田理恵)

第5回 活字！を考える

講師 アンドリュー・デュアー（本学教授）

11/13（金）13:30～15:00

令和2年度第5回公開講座（受講者26名）が11月13日に開催されました。今回の講師は、本学図書館長で

もあるアンドリュー・デュアー先生です。デュアー先生は、「活字！を考える」と題して、東西の文明と科学技術の発展に寄与した「活字」の発明・普及のプロセスについて、たくさんの写真を紹介しながら講演されました。

1620年にイギリスの哲学者フランシス・ベーコンにより発表された哲学の著作『ノヴム・オルガヌム』には、世界を大きく変えた発明について書かれています。それは、火薬、羅針盤、そして印刷技術です。印刷は大きく世界を変えました。人類の歴史を遡ると、文字そのものは約5300年前に発明されました。エジプトの象形文字は皆さん、ご存じでしょう。当時から知識を蓄積することは出来ませんでした。本が手に入らなければ読むことができませんので、ヨーロッパでは、文盲が少なくありませんでした。長らく世の中の「なぜ？」は「神様のなさること」で説明されてきましたが、知識の蓄積、教育の普及により、科学革命へと社会は発展してゆきました。科学によって「予測」が出来るようになります。それゆえ様々な意見がぶつかり合い、時に暴力や争いごとも起こりましたが、科学技術の本格的な進歩が始まりました。

さて、日本では2005年7月に「文字・活字文化振興法」が施行され、10月27日が「文字・活字文化の日」と定められました。活版印刷はどのように出来たのでしょうか？

スクリーンに映し出された写真は、修道士たちが本を手書きしているところが描かれていました。ペンは鳥の羽や草で作られ、本の材料は羊皮紙が用いられていました。イラストのように見える部分も実は文字で、字体が幾つもあることが見てとれました。敦煌の経典は活版ではなく、絵も文字も彫ってある木版でした。日本最古の印刷は8世紀（奈良時代）です。九州国立博物館所蔵「百万塔」の写真がスクリーンに映し出されました。当時は善い行いが自分の将来を良くすると信じられており、木版を使って経典を量産して流通させました。江戸時代になると、本をつくっている人たちの姿が浮世絵に多く描かれるようになりました。版木を彫る人や絵師など、様々な職人は本づくりにかかっていました。日本では、木版の上に墨を塗り、紙を乗せて刷りました。刷る行為は、いわゆる印刷とは工程が異なります。韓国も日本も鋳型を固めた砂に押し込み、液体金属を流し込むことで文字の活版ができるという道具を使っていました。ハングル語は文字数が少ないですが、日本語は文字が豊富ですので活版印刷に向かず、木版は使われ続けました。

さて、海外に話は戻ります。グーテンベルクの写真を見ながらお話を聴きました。大量生産できる方法が求められた時代、本を読みたい人が増えたルネッサンス期は、一冊の本をつくるのにかかる費用は莫大で、聖書の場合、家が一軒建てられるぐらいと言われていました。金細工師だったグーテンベルクは、活版印刷技術を発明した偉大な発明家ですが、実は不運の人でもあるのです。発明のための先行投資で多額の借金を背負うことになったうえ、当時は印刷技術などの発明を守る法律はなく、弟子に技術を持ち出されてしまい、借金の返済をできなくなりました。ここで、「四十二行聖書」の写真を紹介していただきました。ほとんどのページが 42 行の行組みであることからこう呼ばれています。注文に応じて挿絵を入れることもありました。グーテンベルク自身は手書きの雰囲気を残した本をつくりたかったので、活字の書体を複数用いることで、最終的に手書き風の印刷物に仕上げました。幅が揃っていて非常に美しい、つまり、非常に細かい作業だったということです。沢山つくことは出来ず、流通したのは 170 部ほどでした。

次にスクリーンに映し出された文字は角ばったゴシック文字で、重いスタイルの活字でした。文字の形は縦線が太く、横線が細いため、文字がつながってしまい読みにくいです。そこでイタリック体ができました。ベニスの印刷屋であるアルドゥス・マヌティウスがつくった古代ローマの本やギリシア文字の写真も見ることができました。1492年にイギリスで印刷された『黄金伝説』がベストセラーになりました。映されたページの挿絵には「諸聖人の日」が描かれています。東洋では木版印刷の隆盛が長く続き、一つずつ彫って鋳物を手作りしましたが、グーテンベルクの活版印刷でさえ、10万くらいの活字がつくられましたので、漢字の活字のハードルは依然として高かったということです。今回は活字の職人が使うノミ、ヤスリなどの道具の写真を見ることもできました、活字の間隔の調整が大変なこともわかりました。今はデジタルの時代ですが、現代の「フォント」は、元々は活字を入れるケースのことだったと知りました。

日本語では、何万種類もの活版から文字をつくったので、文字を組んでゆく作業は根気のいる仕事です。明治の本では、裏表印刷ができない薄い和紙に印刷し、二つ折りにした習慣が、今の原稿用紙の書式につながっています。真ん中の空白に内容の要約を書けば、半分に折ったらインデックスができるようにした工夫の歴史です。江戸時代は出版文化が盛んだったが、印刷の工程は大変

でしたので一つの作品を千部ほど印刷しました。売るといよりは貸本屋に流通しました。岐阜にも現在でも活版を使用している事業所があります。長良川沿いの河原町と美濃市にある和紙専門店です。ふらっと訪ねてみられるのもよいでしょう。最後に、師範学校編纂『読書教本』や和文タイプライターの写真も紹介いただきながら、日本の活字の歴史を味わい、東洋と西洋の印刷技術の違いを学ぶことができました。

(文責 遠藤雅子)

第6回 検査値の「H」「L」を考える

講師 多和田嘉明 (本学講師)

12/2 (水) 13:30~15:00

令和2年度第6回公開講座(受講者38名)が12月2日に開催されました。本学健康福祉学部管理栄養学科講師の多和田嘉明先生による「検査値の「H」「L」を考える ~大学は知の宝庫~」というテーマの講演でした。多和田先生は2年前まで臨床検査技師として病院で40年ほど勤務されていたご経歴がおありだそうです。講演の内容が詳細かつ多岐にわたりましたが、健康意識の高い受講者の皆様が熱心に聞いていらっしゃいました。

講演内容で特に印象に残った点をまとめさせていただきました。

お話の内容でまず驚いたことは、検査の基準値が施設ごとに違うということでした。また検査結果の「H・L」自体をあまり気にする必要がないこと、それよりもむしろ自分で検査結果のデータを管理するのが重要であり、個人の検査値が基準値内にあっても一定方向に変動が始まったらその時点でかかりつけ医に相談する必要があること、さらに検査結果の検体コメントは必ずチェックすべき重要項目であり、現場の検査技師の説明を聞いて確認したほうが良いなど大変役に立つ情報を教えていただきました。

また健診検査は項目数が多くなればなるほど「H・L」は多く出るという率直なご指摘や、治療の指標にはなるが一部のがんを除いてがんを発見する目的での腫瘍マーカー検査も意味がないなど長年の現場経験に基づく専門家の生の声が聞けたことは大変興味深く有意義でした。

最後に現状コロナ禍で疲弊が増す医療現場で働く医療従事者の方々のご苦勞など医療現場の危機・過酷さ等にも触れられました。また、国民皆保険によって誰もが医療を受けられる日本の医療格差のない素晴らしい制度が、この先も何とか続いてほしいという先生の切なるお言葉

に心より賛同し講演は終わりました。

(文責 白木麻美)

第7回 ベートーヴェンの音楽の新しさを考える

講師 菅野道雄 (本学教授)

12/18 (金) 13:30~15:00

令和2年度第7回公開講座(受講者36名)が12月18日に開催されました。菅野先生は今年度のシリーズのテーマである「〇〇を考える」ことをクラシック音楽の観点から見ることにしました。

今年はベートーヴェンの生誕250周年に当たる年です。コロナ禍の中で、本来の世界中で実施するはずだったベートーヴェン作品の演奏会などができなくなりました。しかし、本講座では短い時間でベートーヴェンの作風の斬新さを考えさせる作品を2つ鑑賞しました。

西洋の音楽史の中で、ベートーヴェンほど有名な作家はいません。その知名度は現在だけではなく、活躍しているときも非常に高かったです。ベートーヴェンのお父さんはモーツァルト同様に非常に若いころから音楽界に出しましたが、彼は自分の表現を見つけ、独創的なスタイルで作曲をしました。

今日は最初にベートーヴェンの1808年から1811年の作品、ゲーテの戯曲「アテネの廃墟」のための音楽から「トルコ行進曲」を鑑賞しました。トルコ風の芸術は流行っていましたが、ベートーヴェンは従来の貴族向けのかしこまった作風をさけて、感情表現を重視した作品に仕上げました。

ベートーヴェンの貴族や上流社会に対する考え方の表れとして、ゲーテと出会ったときの話が紹介されました。お散歩中に向こうから歩いてくる貴族の集団に対して、ゲーテは立ち止まり、帽子を脱ぎお辞儀しましたが、ベートーヴェンは変わらずに歩き続けて、貴族が自分に向けてのお辞儀を当たり前のように受け止めました。「ゲーテよ、偉大な作家であるあなたはなぜあんなくだらない人たちに頭を下げるのか?」と失望したように聞きました。ベートーヴェンにとって、人の価値は生まれと身分ではなく、感性と思考力にあったと思われます。

二つ目に鑑賞した曲は「交響曲第7番イ長調作品92」でした。「第5(運命)」などではトロンボーンなど、交響曲にめったに使われていない珍しい楽器を導入して、新鮮な音色を生かしていましたが、この曲では伝統的な編成に戻っています。しかし、曲の構成は斬新で、同時代の作曲家ヴェーバーは「ついにベートーヴェンも狂ったか」とつぶやいたそうです。それでも、聞いた人の間で評判は良く、高く評価されました。菅野先生は第7が「ベートーヴェンの9つの交響曲の中でも、最もポップでロックな作品ではないかなと思うのです」と話しました。

ベートーヴェンの新しさを十分に考えさせられる講座でした。

(文責 アンドリュー・デュアー)

A Thinking Lifestyle: Hints from the University
Tokai Gakuin University and Tokai Gakuin University School
of Junior College Division 2020 Open Lectures

University Social Contribution Committee

Abstract

This university offers a series of open lectures every year, organized by the University Social Contribution Committee and held in the university library. Each lecture is given by a faculty member. The overall theme asks participants to think about aspects of their lives they have begun to take for granted, and each individual lecture presents a topic of general interest related to the lecturer's field of research. Brief resumes of each lecture have long been posted to the university's home page, but since the topics relate to faculty research, they have been included in this year's research report.

Keywords : Open lecture, Dietary health, Conjugal love, The Tale of Genji, Life expectancy,
Moveable type, Medical testing, Beethoven

